
噂の側室

ジグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噂の側室

【著者名】

ジグマ

【あらすじ】

王城で囁かれている噂は、見た目以外芳しくないものばかり。
そんな悪名ばかりが目立つ側室の話。

まじめつの尊

【東のフォレスター国】

と聞けば、知つてゐる者ならば既にいつかつだひへ。

とても縁が豊かで資源が豊富な国、と。

町は貿易で栄え、どこか古き街並みを感じさせる城下町はとても温かい雰囲気だと。

そしてもう一つ。

唯一悪い噂もある。

それは側室、レオナ・フライトだ。

緩やかに波打つ艶やかな黒髪、少しだけ吊り上がった大きな瞳は優雅な瑠璃色。

肌は陶器のように白く滑らかできめ細かく、紅をさすとほんのり色づいた唇は艶がありふつぶらとしている。

姿に関してはまったく問題はない。むしろ数々の側室の中でも飛びぬけて可愛らしい容姿だったりする。

血筋もいい、なんせ先々代の国王がずいぶんと年を取してからひとかに生ませた庶子だ。

まあ母親は庶民ではあるが、直系の血を引く娘は多くはない。年は今年で一八歳になり、老いているわけでもない。

ではなにが問題なのか、それは間違いない彼女自身だ。

派手な顔つきに見合つた煌びやかなドレスと宝石を常に身にまとつて、

夜会があればさらにその豪勢さに磨きがかかる。

それも一度着たものは2度と着ないという徹底ぶり。

宝石に関してもしかりだ。

他の側室たちには「贅沢が生き甲斐では?」といわれている。

とはいっても彼女はあまり奥の離宮から出でることはない。だがまたそれが怪しいと、噂に拍車がかかっている。

国王以外の男と裸を共にしている、気に入った近衛を囲っているなど、さまざまな憶測が飛び交っている。

ついでにその食欲もまたすごい」という。

朝夕は一食でいいというが、昼食はなんと10人前を平らげてしまうという。

小柄な彼女のどこにそんな大量の食事が収まるのか、宫廷ではもっぱらの噂だった。

そんなレオナ・ライト。
フォレスター國王の側室。
いい噂はほほない。

この物語の主人公である。

尊と実状？

レオナ・フライトといえば、王城での尊はもういたる悪女やら贅沢妃やら、そんのがほとんどの側室だ。

まれに姿形だけはいい、といわれることもある。

まあ「だけは」というのが、単に褒めていた言葉ではないとかかるだろう。

着飾ることをなによりも愛する少しおつむの弱い側室だと、周りはひそかに声を合わせて彼女を笑う。

そんな彼女の朝は、他の側室より早い。

本来侍女付きの身分の高いものは、彼女らが起きて来るまでベッドから出ないものが彼女は違つ。

侍女が来る前に自らクローゼットを開けて、その中のドレスから髪飾り、アクセサリー、靴その他小物全般を選ぶことから始まる。何度もレオナ付きの侍女がそのような真似はしないでほしいと言つても、彼女は頑として首を縦に振ることはなかつた。

「さて、今日はどうしよう

今日も侍女がやつてくる前に起床し、開けたクローゼットの前にレオナは立っている。
目の前にかかるドレスはたつたの5着。
午前中に公務があるから、特に煌びやかなものを選ばなくては。
しかも今日の公務は国王の隣に立つのだ、いつも以上に気をつけねばならない。

「ドレスはこれでいいわね、あと靴は…、髪飾りはどれがいいかし

靴も髪飾りもアクセサリーすらも、贅沢妃といわれるほどの数は持ち合わせていなかつた。

どれも両手で足りるほどどの数で、彼女は悩みつつも選んでいく。

選んだ一切をドレッサーの前のテーブルに置く。

今日はとても晴れていて日差しが眩しいから、それに合わせて白色をメインにコーディネートしてみた。

真珠と纖細なレースをふんだんに使った光沢のあるドレスに、同じく真珠をあしらつた髪飾りとピアス。

首元にはレオナの瞳と同色の、大粒のラピスラズリのついたチャーチーを。

少しでも低い背をカバーするために、靴はヒールの高いものにした。ついでにこれなら脚を長く美しく見せることもできる。

いくぶんシンプルな気もするが、たまにはこういった素材を生かした服装もいいだろう。

もともとレオナはシンプルなほうが好きだ。

時計を見ればまもなく侍女がやってくる時間だ。

そのときを待ちつつ、レオナは自ら櫛を取り髪を梳く。

少し癖のある髪ながら、毎日寝る前にローズオイルを染み込ませているので絡むことなく滑らかに櫛が通る。

自分の衣服を選ぶことと同様に、髪梳きも彼女の大事な一日の習慣だつた。

一櫛梳ぐたびに、レオナは自身に言い聞かせる。

これからはじまる一日は、【側室、レオナ・フライト】なのだと。

噂と実状？

「ンンン」と控えめに扉をノックする音が聞こえた。

レオナは髪を梳いていた手をゆっくりと止める。
目を閉じ、これからはじまる一口をすでに疲弊したといわんばかり
に嘆息してから、意識を切り替えるようにあえて明るい声を出す。
唯一の長所と噂れている綺麗な顔に、他者を惹きつける妖艶な笑顔
を貼り付けることも忘れない。

「どうぞ、お入りになつて」

「失礼します。レオナ様、おはよひびきぞります」

「おはよう」

静かに扉が開けられ、現れたのは侍女だ。

レオナが側室として王城に上がつてからの約半年の付き合いだが、
典型的な主従関係だけで友人のような気安さはない。
レオナは彼女に心を開こうと思つていないし、侍女もそうだろう。
お互い挨拶や必要な事柄を言つだけで、それ以上話すことはほぼな
い。

「またそのように自ら衣装をお選びになつて…、それらはわたくし
たち侍女の仕事にござります」

「こればかりは譲れないわ」

この会話も必要なこと。

側室として、身分の高い人間のすべきことではないとやんわりと指
摘する。

それに主が首を縦に振るかはまた別問題だが、侍女の仕事だ。

けれどさすがにこの会話を数ヶ月毎日やれば、相手も諦めてくるようで、それ以上なにもいうことはなかつた。

侍女が引いてきたワゴンには朝食が乗せられていて、いい匂いが部屋を満たす。

侍女はそれらを手際よくテーブルに並べ、紅茶を淹れる。レオナがストレートティーよりもレモンティーが好きだと知つてゐる彼女は、スライスしてあるレモンとハチミツを紅茶に入れた。

優雅に手を伸ばし、レオナはクロワッサンを一つ取る。

焼き上がりがつてもないようで、小切れくなければバターの香りをたつぱり含んだ湯気が立ち上がつた。

一口いれれば、さくわくとした感触と焼き立ての甘さが広がる。

ずいぶん前に「とても美味しい」とつこ漏らしてから、よく朝食に上がるようになった。

たぶんその啖きを聞いた侍女がコックに伝えたのだろう。

朝食もそこそこ、レオナは少し冷えてしまった紅茶を飲み乾した。後片付けをする侍女を見つづ、口を開く。

「今日の午前、陛下と一緒に一緒に公務がありますの。陛下のためにも、お化粧はいつも以上に念入りにお願いしたいのだけど」

「専属の化粧師に、そのようにお伝えいたします」

「ありがとうございます。きっと陛下の御心を捉えてみせますわ

少し頬を染めて、いかにも陛下に会えるのが楽しみだといわんばかりの顔をした。

ただ着飾つて、その見田麗しで国王の寵愛を得よつとする。
賢いとはとてもいえそうにない、姿形だけを気にするレオナリオナまた
しく、尊のおつむの弱い側室だった。

噂と実状？

ただいま午前8時30分。

午前中に予定されている、レオナの公務は9時から約1時間ほどだ。その内容は謁見の間にて国民　そのほとんどは貴族だが　から のさまざまな要望、要請を聞くこと。

この公務は週7日のうち6日行われていて、国王と王妃　現国王にはまだ王妃がいないため側室　　が出席するのが決まりだ。ちなみに離宮に暮らす側室はちょうど6人いるので、毎日ローテーションでこの公務をこなしている。

今日はレオナが国王とその公務をこなす日だった。

すっかり身支度を整えたレオナは、落ち着かない様子で自室をうろうろ歩き回る。

レオナ本人選んだ純白のドレスは、見事に彼女の魅力をこれ以上なく引き出していた。

真珠とレースをあしらつた髪飾りは、彼女の緩やかに波打つ黒髪を品よくまとめ上げている。

細く白い首筋には、大粒のラピスラズリが輝く繊細な作りのチョーカー。

目鼻立ちがすつきりとしているレオナの顔は、化粧を乗せることでさらに美しさが増していた。

傍には侍女が控えていて、そんなレオナを不躾にならない程度に見遣っている。

が、あまりのその様子を見兼ねたのか、侍女は口を開いた。

「…ハーブティーでも淹れましょ、うか？」

それは暗に『いい加減に見苦しい、落ち着きなさい』と示す言葉に違ひない。

このフオレスタは、自然の豊かさや資源の豊富さだけではなく、教育体制も整つた非常に安定した国だ。

男女問わず最低限の教育 読み書きは義務として、町の教会や修道院にて無償で受けられる。

そんな秩序や情緒を重んじるこの国では、知性あふれる女性が男性に好まれるのは必然といつべきか。

寡黙ながらも臣下から信頼される、現国王の女性の趣味もさうであるつともっぱらの噂だ。

着飾ることをなによりも気にし、おつむが弱い娘などもつてのほか。けれどレオナは、そんなことは気づいていないといつぶつに侍女に眩しいくらいの笑顔を向ける。

「いいえ、けつじつよ。ああ、陛下にお会いできるのときが待ち遠しいわ」

侍女はもうなにも言わず、主に気がつかれないよう口に嘆息するばかりだった。

結局レオナは、公務まだ20分もあるところの謁見の間に出口いた。

今にも飛び立ちそうな、傍から見ても浮かれた彼女の足取りは、淑女というにはまだ早い幼い娘のようだ。

仮にも側室の一人であるのにと、すれ違ったメイドや大臣たちは表面上は挨拶こそするが、内心は彼女を笑うばかりだった。

あとこの空中廊下を進み、階段を下りれば謁見の間だといつていいで、向かいから国王が歩いてくるのが見えた。

背後に宰相たちを引き連れて、なにやら話しながら歩いていく。やがてレオナに気がついたようで、国王は足を止めれば続いていた臣下たちもその歩みを止めた。

一週間ぶりに会った国王は、記憶の中のものと寸分違わぬものだった。

年はたしか24になると記憶しているが、正直とても年相応とはいえないと思う。

むろん精悍な顔立ちは非常に男性的で、魅力的だとは認めざるを得ないが。

きっと国王ならではの圧倒的な威厳が強すぎるのだ。

落ち着いた風格はとても20代のものとは思えず、加えて寡黙な態度がさらに年齢を引き上げているのだろう。

色素の抜けたような亜麻色の髪と金縫の瞳は、若干その印象を和らげてはいるようだが、あまり効果はないようだった。

「おはよひびきます、陛下」

レオナは妖艶な笑みを浮かべて、国王に走り寄る。
細い腕を広げて柔らかく抱きしめ、自分より頭一つ背の高い国王を、
彼女は熱を帯びた瞳で見上げた。

国王の後ろに控えた宰相らが、レオナの態度に眉をひそめる。

「人前で、しかもただの側室の一人がそのような態度はいかがなものか…」といわんばかりだった。

レオナはそんな彼らにすら、どことなく勝ち誇ったような笑みを返し、国王に這わせた腕にさらに力を込める。

「お会いしあつございました」

国王はなにも言つわけでもなく、形式的にそつとレオナの抱擁を返すだけだった。

噂と実状？

午前中の公務はあつとこゝろ間に終わり、国王との会話もそひやうて元気で、レオナは自室に戻った。

帰りを迎えてくれた侍女には、

「少し気分が悪いからしばらく休みます。昼食も用意しなくていいわ」といつて下がらせ今は一人だ。

午後の公務は、ディナーを交える他国との交流目的の夜会が一つある。

けれどそれまでは自由だったと記憶している。

「それじゃあ公務まで数時間、【側室のレオナ・フライ特】はおやすみね」

躊躇いなく真珠をあしらつた髪留めを外せば、見事に結い上げられていた黒髪はあっけなくレオナの肩を覆つた。

髪留めをドレッサーに置いて、今度はクローゼットを開ける。5着しかないドレスで隠すようにしまわれていた少し大き目の箱を取り出した。

近くのテーブルにそれを置いて、蓋をあける。

そこには今レオナが着ているドレスとは素材から違つ、簡素で地味なその衣服とその一式。

離宮で働く侍女の制服が入っていた。

これは誰にも知られてはいけないレオナの秘密だった。

毎朝彼女が自ら衣装を選ぶのもこのためだ、この箱の存在を侍女に

知られてはならない。

無論この側室としては少なすぎる衣装の数も知られてはならない。

レオナは器用に着ていたドレスを脱ぐと、箱にしまわっていた衣装に着替え始める。

ドレスとは违い簡素な作りゆえ、一人でも簡単に着こなせる。飾り気がないグレーのブラウスに、黒のベスト。裾に少し刺繡の入ったひざ丈の黒いスカートに、黒いタイツ。デザインよりも実用性を重視した皮靴はとても歩きやすい。

最後に邪魔にならないよう髪を簡単に編み込み、白いエプロンをすれば完璧だ。

ドレッサーの隣に置かれている姿鏡で、一応その姿をチェックする。と、化粧を落とすのを忘れていた。

部屋に続く洗面所で、いつも以上に綺麗な仕上がりを頼んだ化粧をためらいもなく落とす。

近くのタオルを手にとつて顔を拭けば、もう妖艶な笑みと化粧で他人を惑わすようなレオナはいなかつた。

あるのは作られた側室のレオナではなく、ただのレオナの 年相応の純粋に愛らしい 顔。

さすがにすっぴんでは天氣のいい今日は日差しが強いので、化粧水と乳液をなじませる。

唇にはほんのり色のついたリップクリームを塗ればもう十分だった。

すっかり侍女に化けたレオナは、辺りを見回してから自室を出る。足早に部屋を離れて、まずは調理場に向かった。

そろそろ昼食の支度がはじまるのだろうか、調理場は少しあわただしかつた。

「おはようございます、スレイさん」

「お、どうしたレナ。またレオナ様からのお使いか?」

カウンター越しに厨房をのぞけば、すっかり顔なじみになったゴックがいた。

スレイという名のゴックは、野獣のように大柄の男だった。年は50を過ぎたあたりくらいだろうか。

ボールでなにやらかき混ぜながら、スレイはレオナ もといレナのところまでやってきた。

「はい、昨日お願いしておいたクッキーを受け取りに参りました」「ああ! あれな、用意できるぞ。ちょっと待つて!」

抱えていたボールを調理台に置くと、スレイは奥に姿を消した。しばらくして戻ってきた彼の右手には、木のツルで編まれた大きめのバスケットが、左手には数枚のクッキーが乗った白い皿があつた。うち差し出されたバスケットをレナは受け取る。

「ほれ、これだ」

「ありがとうございます」

「んで、これはお前さんの分だ」

「え?」

数枚のクッキーが乗った皿も差し出された。

目を丸くするばかりのレナに、スレイは笑いかける。

「甘いもの好きだろ？　顔がにやけとる」

スレイの言葉に、レナは反射的に自分の顔に手をやつしてみる。けれど分かるわけもない。

なんだか恥ずかしいと俯いたレナに、笑いながらスレイはお茶を出す。

「少しくらい時間あるだろ？　御側室様の派手なお茶会とは天の地の差だろ？　が、食う間は息抜きしていけ」

「それじゃあ少しだけ…。それと一つ訂正させていただきます、わたくしはこういった雰囲気のほうが好みです」

「こんなおっさんと茶してもつまらんだろうが」

「無理に着飾つた堅苦しいところよりも、気楽でいいと思いますわ」

にっこり笑つて、クッキーを一つ頬張る。

プレインとココアのマーブルクッキーは、バターの甘さとカカオのほろ苦さが絶妙だ。

淹れてもらつた紅茶も最高級茶葉とは違つが、優しい味はほつとする。

ついつい手の進むレナを、スレイは満足そうに見ていた。

ふとそんなレナの手が止まる。

「あ…スレイさん、一つレオナ様から言付けを承つて参りました」

「おう、なんだ？」

「明日の昼食はまた10人前お願いしたいそつです」

「了解～」

「よろしくお願ひします」

それでも、スレイが首をかしげる。

野獣のような巨体の彼が顎に手を当てて考える仕草は、その見た目と違いとても可愛らしい。

くすりと笑うレナに気がつくこともなく、スレイはさりげなく。

「あの細いレオナ様のどこに、そんだけ入るんだかなあ…」

「あら、それでもまだ足りないこともある、とおっしゃつておられましたわ」

「まじかよ、俺よりすげえ腹なんだな」

自ら腹を揺するスレイの仕草に、今度は声を出して笑ってしまった。

噂と実状？

スレイとのゆつたりとしたお茶会を楽しんだ後、レナは彼から貰ったバスケットを抱えて離宮から王宮へと足を運んでいた。

侍女の姿の今は、誰にとがめられることもなくあつさりと城下町に続く門までたどり着く。

門兵に主から城下町まで買い物を頼まれたといえば、簡単に出てもらえた。

城下町までの道を歩きつつ、レナは振り返る。
王城とこの城下町をつなぐ石作りの大きな門は、2階建ての家より
よっぽど高い。

レナより大きな石を何個も重ねて作られていて、城とこより也要塞のような重苦しさがあった。

違う。牢獄のようだ、とレナは思つ。
少なくとも自分にとつては、牢獄そのものだと思つ。
それでもそこで生きていいくしかないレナは、苦々しい思いに顔をしかめる。

今はまだ無理だ。

飛び出すにはまだまだ準備が足りなさすぎる。

側室にと王城に上がって早半年、これだけ時間をかけてできた準備はこの侍女服を手に入れたことだけだ。

まだまだ時間はかかるだろうが、一生にじているつもりもない。

抱えるようにバスケットを持つ手に、無意識ながら力がこもる。

あの城に、自分の味方はいない。

少なくとも【側室レオナ・フライト】にはいない。
否、つべらない。

出でいくときは一人でいじと、ここに連れてこられたときに決めた
から。

レンガで舗装された城下町への道は歩きやすく、20分も歩かぬうちに到着した。

貿易で賑わう町は、王城の雰囲気とは全く違う。
王城は厳かな雰囲気ばかりだが、町は常に活気に溢れていて、きちんと人がここに居て生活しているのだと感じられる。

もともとレオナは修道院暮らしが、王城の生活に近い静かで落ち着いた毎日を主としてきたが、こついつた雰囲気も好きだった。

今は特に【側室、レオナ・フライト】として我慢を要する生活をしているせいか、開放的な町の雰囲気に惹かれるのだろう。

賑わう市場を眺めながら、レナは町から少し外れた場所に向かう。なだらかな小麦畠を過ぎ、のんびりと草をはむ牛たちの牧場を過ぎ、やがてそれは見えてくる。

古めかしいデザインながらも、どこか莊厳なその建物。

高い屋根の上に掲げられた十字架は、ここが教会だと示していた。

そのまま表から入ることをせず、レナは裏に回る。

頼りない木の柵の扉を開け、裏門をたたく。

まもなく出てきたのは、ここに神父である初老の男性だった。

「ここにちわ、神父様。本日もよろしくお願ひします
「ようこそ、レナ様。こちらこそよろしくお願ひします」

「こっやかに笑う神父に、レナはもつてきたバスケットを差し出す。

「子供たちのおやつをお持ちしたのですが、受け取つていただけますか?」

「ありがとうございます、おととあの子にも喜びます」

「ありがとうございます」と、じゅりも嬉しいです」

さあどうぞ」と、神父はレナに中に入るよう勧める。
その穏やかな神父の雰囲気に、王城に来る前の生活を思い出してなんだか切くなつた。

噂と実状？

教会の誰もいない奥の一室で、レナはまた着替えをしていた。

今度は侍女の制服から、修道女が着る白いブラウスと黒いワンピースだ。

すつきりしたデザインは動きやすく実用的で、城で着ているドレスなんかよりもよっぽどいいと思つ。

そそくさと着替えを済ませたレナは、そのまま礼拝堂に足を運ぶ。まもなく昼になろうといつ時間の今は、さすがに誰もいなかつた。正面に置かれた母なる女神を模した石像に、天窓から差し込む光が当てられているこの空間はひどく神聖だ。

女神を前に膝を折り、レナはしばし祈りを捧げる。

やがて顔をあげたレナは、窓の外に視線を向けた。

この教会の建物に続くよう増設されたそれは、孤児院だ。いつもなら子供たちの声が聞こえてくるのだが、今はまったく聞こえない。

ちょうど昼食の時間なのだらう。

今日はどんな授業をしようか、そんなことを考えながらレナは孤児院のほうに歩きだす。

案の定、ちょうど昼食時だったようだ。

食堂をじつそり覗いたら、ここで暮らす子供たちが行儀よく座つて食事をしていた。

まだ一人で食べられない子には、年長の子がそばについて面倒を焼いている。

邪魔してはいけないと、レオナはその場をそつと離れ、いつも授業で使う講堂に向かう。

板張りの廊下は、レオナが歩くたびに少し軋む。

ふとさつきの食事の場面が浮かんで、なんだか少し羨ましくなった。王城に上がってから、レナの食事はほとんど一人だ。他の王族貴族たちとの会食は何度もあつたけれど、お世辞や自慢ばかりが話題に上って食事を楽しむどころではない。温かい雰囲気など微塵もなく、いつだって湿つたようなどろりとした雰囲気だ。

必要以上の香水と化粧の香りに、食欲など起じるわけもない。

つぐづぐ自分は、あの王城で繰り広げられる毎日は合わないのだと思つ。

贅沢など好きではない。必要以上の物もいらない。

穏やかで地味な生活が好きだ。静かに暮らしたい。

それでも耐えねばならない現実には、奥歯を噛みしめるしかなかつた。

必ずあの生活から抜け出してみせる、今はまだ弱音を吐きそうになる自分を叱咤して前に進むしかないのだ。

半刻ほど経つて、レナのいる講堂に向かつてくる足音が聞こえてくる。

一人や一人ではない多さから、食事が終わって皆がこちらに向かってきているのだと察した。

頃合いを見計らって、神父がレナが来ていると子供たちに伝えたのだろう。

「レナちゃんー！」

癖つ毛の栗毛を揺りして、一番手に顔を出したのはルーフといつ少年。年はまだ6つだ。

元気よくこちらに走ってきて、そのままレナに飛びつく。もともと母子家庭だったといつルーフは、レナに母親を重ねているようだとてもよく懐いている。

そんなルーフに続けといわんばかりに、講堂に入ってきた子どもたちはレナのもとに集まってきた。

「ルーフするい！！」

「ここにちはレナ様！ 今日はいつまでいれるの？」

「レナさまー、今日はどんなお勉強するの？」

「みてみてー！ ちやんと宿題やつたんだよー！」

それぞれに言葉をかけてくる子供たちに、嬉しいながらも少し困ったように微笑む。

「待つてちょうどだい。わたくしの一つの耳では、こんなにたくさん の会話はきちんと整理できないの。みんな一度、席についてくれる？ 一人一人とお話がしたいわ。授業は全員とのおしゃべりが終わってから始めましょ」「うー

にっこりと笑つてそういうえば、子供たちは大きな返事とともに各自の席に座り始めた。

子供たちから向けられる視線からは、レナとおしゃべりできる嬉しさが見てとれる。

必要としてくれてるんだけど、溢れきつくなる温かさを感じていた。

無論これもレナの レオナの秘密の一ツ。

レナといつがで城下町にあるこの孤児院で、彼らの教鞭をとつている。

最初に彼女がこの教会にやつてきた理由は別だつたが、そのとき少し子供たちに勉強を教えたのがきっかけになつて、今では公務がな一日や空いた時間を使って足を運ぶまでになつっていた。

もちろんこの穏やかな休息こそも、なんとか【側室レオナ・フライ】を演じ続けられる理由の一つだとレオナは自覚している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8235z/>

噂の側室

2011年12月29日20時37分発行